

## VI

Le ciel est, par-dessus le toit <sup>1</sup>,  
Si bleu, si calme!  
Un arbre, par-dessus le toit  
Berce sa palme.

La cloche dans le ciel qu'on voit  
Doucement tinte.  
Un oiseau sur l'arbre qu'on voit  
Chante sa plainte.

Mon Dieu, mon Dieu, la vie est là,  
Simple et tranquille.  
Cette paisible rumeur-là  
Vient de la ville.

— Qu'as-tu fait, ô toi que voilà  
Pleurant sans cesse,  
Dis, qu'as-tu fait, toi que voilà,  
De ta jeunesse ?

SAGESSE

VERLAINE. OEUVRES POÉTIQUES.

## 金子光晴と上海

劉 建輝 (南開大学)

LIU Jian Hui

1926年、金子光晴は妻・三千代を携えて上海を訪れる。そこで彼は「私たちのあいだで通用するのは全く別なモラルがあること」を知り、「むごたらしい」現実を発見する。以後、二回目の上海行とその後の五年間の海外放浪を挟んで彼の詩の世界は大きく変質する。観念的な美意識の殻から抜け出し、現実直視、現実「活写」への転向である。従来の金子論は往々にして詩人のこの変化の理由をそのヨーロッパ体験に求め、ラディカルな自己とエトランジェの目の獲得を指摘する。しかし後年、この時期の海外体験を回想するに際して金子自身も「七年にわたる長旅」と表現しているように、ヨーロッパの前に三回にわたる上海行とそこでの様々な体験が明らかにその後の変化の方向を決定するものとして認識されるべきである。今回の発表は従来きわめて重要だと認識されながらも具体的な考察が疎かにされてきた詩人のこの上海体験について詩集「鱗沈む」、回想録「どくろ杯」などを手がかりに追跡する。そして上海において詩人がどのようにこの「魔都」を受けとめ、またこの特殊な空間との出会いを通じていかにして自分の詩的感覚を観念的デカダンスから感覚的デカダンスへと変貌させたかについて、そのプロセスの解明を試みる。